収蔵庫の戦時資料

釧路市が米軍による空襲を受けてから今年で70年。先の戦争では「総力戦」という名の下に、あらゆる人々が戦争をするためにかり出されていった。

当館の収蔵資料の中には当時を物語る資料が少なからずある。その中に、戦地へ向かった人々が携帯した寄せ書きが数点あり、国旗の日の丸以外の部分に家族や親戚、地域の人々などがそれぞれ激励の言葉を寄せている。

「大和魂」「撃滅」「必勝」「神風」「突撃」「七生報国」「勝利ノ日マデ」や、「いざ征かん皇国の武士が矛採りて起つ必滅の意気」と綴ったもの、また「銃後も共に行かん」「銃後も戦場」といった文字も見える。

その1点に、学徒出陣で出征し現地で病死した釧路出身者のものがあり、ここには両親の言葉が寄せられていた。

「征ケ　父」「満足ナリ　母」。大事に育てたであろうかわいい我が息子に対して、本心を押し殺して母親がこう綴らざるを得ない当時の空気。強烈なひとことである。その心境はいかばかりであったろうか。

残された人々は戦争が長期化するに従い、生活物資が乏しくなって切り詰められたようすが生活必需品を購入する際に使われた通帳や衣料切符から見てとれる。敗戦によってすべて紙切れとなった債券類は、今でも色鮮やかだ。

また、敵の空襲に備えて訓練に使ったメガホンや、携帯していた防空頭巾、鉄かぶとのほか、実際に空襲で被弾した跡が残る住宅のトタン板や鴨居、幣舞橋の橋げたの一部には圧倒される。

これら資料が保管されている収蔵庫の一角は、ひときわ特別な空間に感じられる。戦後70年。戦争の記憶の風化が目に見えて進んで来ているように感じられる最近の政治の世界。市民の暮らしという目線で、あらためて戦争の時代を検証するとともに、暮らしの記録化をさらに目指すしていきたい。しかし時間は限られている。

（戸田恭司）

大遺跡の片鱗

平成26年の7月から9月にかけて緑ケ岡1遺跡と材木町3遺跡の隣接する市道で水道管布設工事に伴う立会調査が行われました。

工事対象の道路がのびる釧路川の河口に近い段丘には多くの遺跡が存在していますが、昭和の初めごろの調査によると工事地周辺には無数の竪穴住居跡のくぼみがあり、現在の遺跡範囲よりもっと広いくくりで「緑ケ岡遺跡」として認識されていました。その竪穴群は昭和30年代から活発化する宅地造成などの開発行為によって地表面から姿を消してしまい、現在では残念ながら当時の面影をうかがい知ることはできません。

発掘調査はその当時の開発行為の隙間をぬうように部分的でしたが数次にわたり実施され、竪穴住居跡やお墓を中心とする遺構、土器・石器などの多量の遺物が見つかりました。特にお墓は大墳墓群と呼ばれるほどたくさん確認され、複数の人間が同じ穴の中に埋葬されている合葬墓も見つかっています。出土資料をもとに縄文時代晩期の土器型式のひとつである「緑ヶ岡式」が設定されるなど、釧路の考古学研究の重要な基礎資料であり、一部は当館2階の常設展示室でご覧になることができます。

豊富な情報量を持つ大規模な遺跡として知られた遺跡の一部を見ることができるワクワク感がありましたが、工事掘削面積が幅1.2メートル程度で、基本的には一度設置してある水道管を交換する工事によるものなので、状況によっては調査対象となる遺物を含んでいる土層が非常に少ない可能性もありました。実際始まってみるとすぐに土器が見つかりさらに遺構も確認することができ、調査としては狭い範囲ながらかつての大遺跡の片鱗を垣間見ました。

現在では平坦に見える道路も土層を観察してみると、標高の高い場所を削って低い場所に土を盛っている様子が見て取れました。場所によっては元の地表面が残っていましたので、今回の調査範囲の周辺にいまだに眠っているかもしれない遺構や遺物に思いをはせる調査となりました。

（髙橋勇人）